

生命

久栄莊（その三）

私とK君は、家族を含めて兄弟付き合いをしている。その彼が穴子を持ち帰りたいという。釣り上げて氷詰めにして送るしかない。

親しくなった漁師の勝男さんに穴子の釣れる場所を聞くと、尾浦浜の先の「水浜だ」と云う。「穴子は夜釣りでしか釣れないから、出島いずしまに泊まった方がいい」とも云った。彼は一度、家に戻りすぐに帰ってきた。「久栄莊に連絡しておいたから、そこに泊まれ」と云う。餌はサンマか鳥賊いかがいいことも付け加えてくれた。

久栄莊にはこれまで宿泊したことはなかったが、海上からはいつも見ていたので建物は知っていた。出島は連絡船の船着き場付近にしか家並みはなく、久栄莊は離れたところに孤こを楽しむように一軒だけ離れて建っていたのである。近づいて行くとコンクリート製の立派な棧橋を備えていた。我々は夜になるのを待った。夕食を済ませてからの出漁である。そろそろ出ようかと思っていた時、一艘の小船が棧橋に近づいて来た。私の船は夜間でも航行できる装備は付いている。しかし、おじいさんが、夜の海は危ないからと、案内人を呼んでくれたのである。「ありがたいことです」と礼を言い、三十

過ぎと思われる人にも「よろしくおねがいします」と頭を下げると、おじいさんは「なあに、うちの息子だから」と云う。船の舵は彼が握り水浜に向かった。闇夜ではなかったが、やはり夜の海は不気味だった。闇の中での作業だが、仕掛けは単純だから特に問題はない。大小はあったが、穴子は沢山釣れた。

しかし、彼の夜釣りの案内は、これが最初にして最後となったのである。三カ月後、彼は刺網を揚げに島の東側の外海に出て、行方不明になったのである。島中の人の搜索にもかかわらず遺体は遂に発見されなかったということである。この遭難事故は、十月末アイナメ釣りに行った折、あの民宿のＹさんから聞いたのである。さらに、Ｙさんは「あの息子は東京さ行き、結婚して小学生の二人のわらしっこがいたが、離婚してふたりを連れてけえってきたんだわ」と加えた。私はすぐに久栄荘に行き、小さな仏壇に焼香し、心ばかりの香典と花を供えた。老夫婦は一段と老けて見えた。命は海から生まれたといわれるが、海は命も奪うものなのだ。私は立ち入った話をする立場にはないので、「きつといいこともありますから」と言っ

って失礼してきた。しかし、弱者に降りかかる不幸は際限がなかった。翌年の秋の低気圧は久栄荘をも襲っていたのである。私の船の

エンジンを鉄のゴミと化し、出島の東でサンマ船を遭難させ、十六名の命を奪ったあの低気圧である。翌年の初夏になって、Yさんのところへ行くと、「久栄荘は民宿やめだっちゃあ」と云う。彼の話によると民宿も母屋もあの頑丈な栈橋までもが壊れたと云うのである。

「とし とし 齢も齢だしなあ、誰かにくれてもいいってゆうっちゃあ、しえんしえもらったらどうだ」と云う。私は民宿までする気はないと断った。私も海で失ったものは少くない。携帯電話。高級船竿二本。

だが、お陰さまで命はまだある。私はしょうしんもの 小心者で風や波があると船を出さない。海を前にして何度女川から空戻りしたかわからない。からもどり

私にはもう一人面白い過去を持った知人がいる。私の夜間高校時代の友人にI君という人がいた。中卒の現役組だった。彼にはすまないが、私には風体の良くない、何を考えているのか分からない男に見えた。

ずっと後になって聞いたところによると、彼も私をそのように見ていたというから、以心伝心は信頼の反対の意味も持っていることになる。もっとも、彼は一年間で我々の視界から消えたので印象が薄かった。後日談になるが、彼が云うには、学期毎の数学のテストで及第点が取れず、単位不認定となり留年となったのである。それ

を機に退学。宇都宮へ行き大工見習いとなった。ところが、その親方は厳しい人で毎日木片で殴ったと云う。彼はつくづく考えた。

あと何年このような生活が続くのだろうか。自分は数学に及第点をとれば進級できたのだ。家が無性に恋しくなった。ある夜そこを抜け出し家へ戻った。彼は新聞配達をしながら、自分の数学はどこから解らなくなったのだろうと考えた。小学校の分数からだと気がついた。分数は当時小学四年生の教科書に初登場する。彼は本屋に行き分数の参考書と問題集を買い、数学だけを勉強した。翌年、夜間高校に再入学、数学の勉強は続けた。彼にとって数学は、トラウマになっていたのかも知れない。気がつくやうと三年の時、(定時制は四年間)数学は学年でトップになっていた。大学は工学部電気科に合格、四年後、高校の数学の教員になったのである。我々は高校の教員同士として、再会したのである。彼も驚いたろうが私も同じように仰天した。古人いわく、「士三日なれば括目かつもくして相待つべし」である。時代はバブルの頃で、彼はその後、外資系の会社に教員の倍の給料で引き抜かれ、今も健在らしいが、この転職が良かったのか、失敗だったのかは質問出来ないままにいる。ともあれ青春とは、砂漠の中を未知のオアシスを求めて進むようなもので、危険や失望も多

い代わりに、歩き続けた者にはご褒美もあつた。我々が、あの青春を生きた時代が、良かったのか悪かったのかは分からない。自分の立っている時代は、自分には見えないからだ。

ただ、一つ言えることがある。「幸運」は向こうからはやって来てはくれない。人生とはやはり、「幸運の女神の前髪を自ら掴つかみに行くものだ」ということである。歴史を繙くまでもなく、わが国に限って言えば、現在いまと云う時代ほど出自や身分に関係なく、多少の運不運はあつても、誰もが平等で、努力が報われる可能性のある時代はなかったはずである。「平凡を嘆く勿れ、努力を厭う勿れ、希望を捨てる勿れ」人間は一寸した風邪でさえ、これが直ってくれればと願う。しかし、願いが叶って全快しても見えざるものへ、感謝する人はほとんどいない。芋粥の美味しかったことを忘れてしまうのである。久栄荘は住む人もなく、傾いたまま現在いまもある。